

ベラルーシ公開情報とりまとめ

(7月29日～8月4日)

2024年8月8日

在ベラルーシ大使館

【主な出来事】

- ロシアの無人航空機が最低5機ベラルーシ領空に侵入(7月31日)
- 死刑判決を受けたドイツ国籍者の釈放(8月1日)
- ラトビアは、ベラルーシで登録された乗用車の乗入禁止措置を緩和(8月1日)

【外交】

●対北朝鮮関係に関するリュジエンコフ外相の発言

- ・ベラルーシから北朝鮮への輸出に関して将来性のある分野は、医薬品と食料品(特に粉乳、肉、幼児用食品)。
- ・ベラルーシは北朝鮮の未就学児や低学年の児童を教育するためのプログラムに関心あり。また、ベラルーシ国立教育大学、ベラルーシ国立大学、ベラルーシ国立医科大学は北朝鮮の大学と協力に関して合意。
- ・ベラルーシは、北朝鮮との二国間プロジェクトだけでなく、ロシアや中国とも共同の3か国のイニシアチブへの参加も検討する用意あり。

(7月29日 国営ベルタ通信)

●外務省はレバノンに滞在するベラルーシ国民に対し、即時退避を呼びかけ

- ・ベラルーシ外務省は、中東情勢の緊張の高まりを受け、レバノンに滞在しているベラルーシ国民に対し、状況が安定するまでの間、同国より即時に退避するよう呼びかけ。

(7月31日 外務省)

●ラトビアは、ベラルーシで登録された乗用車の乗入禁止措置を緩和

- ・ポーランド発の独立系メディア「ベルサト」がラトビア金融捜査庁(Financial Intelligence Unit of Latvia)からの情報として報じているところによれば、ラトビアでは、個別の事例によっては、ベラルーシのナンバーの乗用車によるラトビア国境の通過が認められる。
- ・個人のラトビア入国を許可することができるのは、国際的な制裁の履行を追跡する機関であるラトビア金

融捜査庁。同庁が許可申請の審査を行う。同庁によれば、ベラルーシのナンバーの乗用車を売却するためラトビアに入国するのではない場合に(ラトビア入国)許可を取得できる。

- ・許可を申請できる者は以下のとおり。

- ①ラトビア国民であって、ベラルーシで登録されている自身が所有する乗用車によって入国を希望する者
- ②ラトビア国民であって、(ベラルーシ居住の)近親者が所有し、ベラルーシで登録されている乗用車によって入国を希望する者
- ③ベラルーシ国民であって、有効な査証または居住許可を有し、かつベラルーシで登録されている自身が所有する乗用車によって入国を希望する者

- ・いずれの場合でも、当該乗用車を個人の目的のために使用することが必須条件。

・ヴァチョルカ・チハノフスカヤ民主勢力代表顧問は、同決定は、同事務所の働きかけによるものだと、ラトビアに対する謝意を表明。

(8月1日 「ゼルカロ(鏡)」、「ポジルク」)

【内政】

●クブラコフ内相は、2025年の大統領選挙につき発言

- ・クブラコフ内相は、治安関係者らに対し、2025年の大統領選挙に向けて「気を抜く事はできない、どのような事態が発生しても対応できるよう準備しておく必要がある」と述べ、念入りな準備の重要性を強調。

(7月30日 「ゼルカロ」)

●8月2日現在の政治犯の数は1,390人

(8月2日 人権団体「ヴァスナ(春)」)

【軍事・安全保障】

●ロシアの無人航空機が最低 5 機ベラルーシ領空に侵入

- ・7 月 30 日深夜から 31 日未明にかけ、「シャヘド」型の自爆攻撃型の無人航空機(UAV)が少なくとも 5 機、ベラルーシ領空に侵入。
 - ・1 機目の侵入から 30 分後には、ベラルーシ空軍・防空軍の戦闘機が発進。現場付近を飛行するも 31 日 11:30 頃には帰投。その後も UAV の侵入は継続。
 - ・侵入した UAV のほとんどはウクライナ方面に飛び去ったが、1 機はベラルーシ領内を 260km 以上飛行し、ブレスト州南東部ストリン市にまで到達。
- (7 月 31 日「ベラルスキ・ハユン」)

●ベラルーシから欧州への不法越境の試み

- (7 月 29 日～8 月 4 日)
- ・リトアニア国境警備局は少なくとも 6 人を阻止。
 - ・ラトビア国境警備隊は少なくとも 137 人を阻止。
 - ・ポーランド国境警備隊は少なくとも 314 人を阻止。
- (7 月 30 日～8 月 5 日「ポジルク」)

【治安・犯罪】

●死刑判決を受けたドイツ国籍者の釈放

- (1) クリーガー氏に対する恩赦の発表
- ・7 月 30 日の日中、ルカシェンコ大統領は、ベラルーシで死刑判決を受けたドイツ国籍の男性リコ・クリーガー氏の事件に関する会合を開催し、クリーガー氏による恩赦(減刑)の嘆願を検討。同日夕刻、大統領府はクリーガー氏の恩赦(減刑)を発表。
 - ・同日夜、エイスマント大統領報道官は、ドイツ側からクリーガー氏の引き渡し要求等があれば検討するとした上で、現時点でドイツ側からクリーガー氏について問い合わせ等は来っていない旨発言。
 - ・7 月 31 日、フィッシャー・ドイツ外務省報道官は、ドイツ側がクリーガー氏の可能な限り早い帰国に向けて尽力している旨発言。
- (2) クリーガー氏の釈放
- ・8 月 1 日、ベラルーシで死刑判決を受けたドイツ国籍の男性リコ・クリーガー氏が釈放された。同氏の釈放は、ロシア・米国・ドイツ等も関わる大規模な収容者の

交換を通じて実現。

- ・同日、ロシア大統領府は、クリーガー氏の死刑判決の恩赦(減刑)等につきルカシェンコ大統領への謝意を表明。8 月 2 日、ベラルーシ大統領府は、本件に関してプーチン露大統領から電話があり、ルカシェンコ大統領への謝意が伝えられたことを強調して発表。
 - ・8 月 2 日、ルカシェンコ大統領は、ベラルーシに依頼があったため本件に関わったこと、外交ルートではなく特務機関のルートで交渉が行われたこと等を発言。
- (3) 背景事情
- ・6 月末、クリーガー氏は、諜報活動やテロ行為を理由に死刑判決を受けた。
 - ・7 月 25 日、国営 TV「ベラルーシ第 1 チャンネル」は、同氏に関するドキュメンタリー番組を放映。同番組によれば、同氏はウクライナの義勇兵組織に参加し、ミンスク郊外での鉄道爆破事件を実行したとされていた。
 - ・26 日、同氏は「過激主義者」リストに追加された。
- (7 月 30 日 大統領府、「Sputnik.by」、8 月 1 日「ゼルカロ」、2 日 大統領府、「ポジルク」)

●新たな拘置所の開所

- ・内務省は、ミンスク地区パシコヴィチ村近郊の工業地域「コリャジチ」に新たにミンスク市及びミンスク州第 1 拘置所を設置。
- (8 月 2 日 国営ベルタ通信)

【抗議勢力の動き】

●「新たなベラルーシ 2024」会議の開催(於:ビリニウス)

- ・本会議で採択された「連携のプロトコル」において、チハノフスカヤ民主勢力代表の任期につき、ベラルーシにおいて公正で自由な選挙が行われるまで、ないしはチハノフスカヤ氏が自ら辞任を決定するまでと記載。
- ・民主勢力が力を結集するための「プラットフォーム 2025」を採択。その主目的は、ルカシェンコ体制の合法性を剥奪し、2020 年の改ざんされた大統領選挙の結果を認めず、ベラルーシ人のために欧州及び民主的な世界の開放性を確保すること。
- ・チハノフスカヤ民主勢力代表は「統一移行内閣」の国家安全保障・国防担当代表、国際協力・対欧州協

力担当代表、若者政策・学生担当代表、副首班（権力移行担当）をそれぞれ任命。

・エゴロフ政治評論家（「調整評議会」前議長）は、ルカシェンコ体制が存続している現状を踏まえ、政治犯釈放に向けたルカシェンコ体制との対話を提案。これに対しラトウシコ元文化大臣（「統一移行内閣」副首班）は、犯罪者をベラルーシの大統領と認めるつもりはないと反論。

・キジム・ウクライナ外務省ベラルーシ担当特使は、本会議のフリンジで、ゼレンスキー・ウクライナ大統領とチハノフスカヤ民主勢力代表の会談の時期につき問われ、今はそのような会談の準備ができていない旨発言。

・チハノフスカヤ氏とラトウシコ元文化大臣は、ロシアと米国等の間で交換された収容者の中にベラルーシの政治犯が含まれていなかったことに関し、民主勢力は収容者の交換に関する交渉について知らず、交渉に参加もしていなかった旨発言。

（8月3日 チハノフスカヤ氏公式サイト、「ゼルカロ」、「ポジルク」、「サダルナスチ」、4日「ポジルク」）

【統計等】

●2024 年上半期の汚職に関する統計

・2024 年上半期に汚職により有罪判決を受けた人は328 人（前年同期比 4.4%減）。

（7月30日 国営ベルタ通信）

（了）